

[担当教員(前半)]
各研究室指導教員

■課題趣旨

神戸のウォーターフロントは緑豊かな六甲山系と大阪湾の青い海に挟まれた日本を代表する港町である。開港以来、もの、人、文化のゲートウェイとしての役割を果たし、神戸独自の都市的な文化を醸成してきた。

しかし、近年港湾部の工業や物流の衰退に伴いウォーターフロントの未来へのビジョンが問われている。ウォーターフロントの再生は世界的な課題であり、アメリカ・シアトル市においても老朽化の進んだ高架高速道路の地下化及び港湾防波堤・インフラの更新、そしてダウンタウンと水辺をつなげて国際的な都市の競争力を高めるための取り組みが今まさに始まっている。

今回の課題「神戸ウォーターフロント」は2つの面的な敷地を対象に、ウォーターフロントのビジョンを環境、文化、生態、安全、健康、アクティビティなど包括的な視点から考えることとする。既存の都心エリアの魅力や既存の公共空間や公園などランドスケープ資源を活用しつつ、道路や港湾など土木施設のリノベーション、そして海と都市をつなげて世界的な神戸ウォーターフロントを構想するための計画を提案してほしい。

■敷地(別紙地図)

計画地区は、別紙地図に示す神戸市のウォーターフロント及びその周辺地域を含む A、B のうちいずれか一つを選択する。地区特性、土地利用、ウォーターフロントへのアクセス等を考慮すること。

■A地区：都心ウォーターフロント地区

A1：みなとのもり公園2期、第1～第3突堤、波止場町1丁目、東遊園地～神戸市役所付近
A2：メリケンパーク、ポートタワー周辺
拠点オープンスペース：東遊園地(A1)、メリケン広場(A2)など

■B地区：兵庫運河ウォーターフロント地区

B1：新川運河
B2：兵庫運河
拠点オープンスペース：神戸市卸売市場跡地(B1)、兵庫運河旧貯木場周辺(浜山キャナルプロムナード・浜山小学校・ものづくり復興工場付近)(B2)など



てくてく

小島尚久 鈴木彩伽 中川葉里 東美弦(三輪・栗山研究室)

まちの中に存在する余白。ポテンシャルの高さにも関わらず活かしきれない「まちの余白」に、役割を与え、それぞれを結びつけることで、まちに流れを生み出し、人々が海へと導かれるシステムを構築する。

計画演習 II

09 2. 神戸ウォーターフロント ランドスケープ課題

開講年次：学部4回生前期

[担当教員(後半)]

ランドスケープ設計課題

向山雅之(竹中工務店) 福岡孝則(特命准教授)

[Teaching Assistant]

坂口大賀(A64) 馬場智美(A64)

■課題趣旨・目標

前半で取り組んだアーバンデザイン課題は都心部のウォーターフロント地区と兵庫運河ウォーターフロント地区を対象にビジョンを環境、文化、生態、安全、健康、アクティビティなど包括的な視点からの構想することを目ざした課題であった。後半のランドスケープ設計課題は未来の地域の拠点として都市の活力を牽引するオープンスペースのデザインである。建物・道路・公園などのインフラの更新期を迎えた敷地、従前の機能が著しく低下した水辺の工業跡地や突堤、水辺へ点在する既存の河川や広場、公園などを対象として神戸都心部と兵庫運河ウォーターフロント地域再生の具体的な方法とデザイン提案にランドスケープの発想から取り組む。

■課題の進め方・ポイント

- ・前半課題のマスタープランの中で拠点となるオープンスペース(具体的には広場、公園、道路、歩行者空間、土木施設、埠頭、工業跡地、公開空地など)を選定する。グループの中で選択した拠点オープンスペースを組み合わせることで都市にどのような活力をもたらし、変化を起こすのか目標を設定する。
- ・都心部とウォーターフロントの関係性を再考し、都市における新しい水辺の意味を考える。
- ・拠点とする対象敷地の周辺1街区程度(拠点エリア)も拡大した対象敷地として捉えデザインコンセプトを構想する
- ・敷地における環境条件などの直接的なコンテキストと、経済・文化・社会・生態などより広い概念のコンテキストの双方を理解し、設計を進める。

ランドスケープ計画課題

北後明彦(教授) 近藤民代(准教授) 山口秀文(助教)

- ・対象敷地(拠点)と周辺エリア(拠点エリア)においてどのようなランドスケープ操作が都市活性化のツボとなるのかを敷地周辺の操作も考えつつ設計を進める。
- ・面的な敷地における地形操作、植栽・水・小構造物等ランドスケープから発想する敷地デザインを学ぶ
- ・プログラムやアクティビティを構想し、都市内の回遊性を高めるだけでなく多様な利用を誘発するデザインの仕組みをつくる。
- ・工業跡地や道路空間・駐車場など機能を低下させた面的な敷地を読み替え、ランドスケープ的に再生する手法を開発する。
- ・都市スケール～身体スケールにおけるデザイン操作を行い、スケールの伸縮と操作の有効性を立面・断面・詳細などの検討を通して空間の設計へとつなげる。
- ・個別の設計を進めながら課題の大きな目標に対してグループ・メンバーの個別の敷地デザインがどのように全体に作用しているか、確認しながら設計を進めること。

■講評会の様子

[ゲスト講評者]

嘉名光市(都市計画家、大阪市立大学准教授)

宮原克昇(ランドスケープアーキテクト、鳳コンサルタント株式会社)

田原潤(神戸市企画調整局総合計画課)

[OB 講評者]

杉野卓史(安井建築設計事務所、AO42)

中島千晶(MBA Candidate at UC Berkeley Haas School of Business AC9)



■学外展覧会への出展

・京都ランドスケープデザイン展 2016(京都市 元・立誠小学校)

伊藤大輝、小林諒、中川菜里、松田星斗



水辺が息づき、色づき、そして近づく

伊藤大輝 (末包研究室)

兵庫運河はかつて、物流拠点として開発され、今も橋桁の高い住吉橋が残されているが、市民にとって利用しにくいものであった。橋を利用し、その周りをつなぐように新たな動線と滞留を考えたハイウェイオアシスを提案する。



KNIT - 移ろいの結節点 -

小林諒 (遠藤研究室)

人口減少の予想される兵庫運河周辺地区に新たな公共交通機関として LRT・水運を導入し、結節点となるこの地にターミナル機能とアーバンアウトドアを合わせたオープンスペースを提案する。多様な人々の多様なライフスタイルを結ぶ場所となる事を期待する。



巡る

中川菜里 (三輪・栗山研究室)

神戸の南端、新港突堤跡。今では新しい港に役目を渡したこの場所に、海に突き出た土地だからこそ気付く神戸の山と街、海の眺望、海風を取り込むおおらかな動線を通し、ひとまわりしながら神戸を体で感じられるオープンスペースとして提案する。



Intersection

松田星斗 (遠藤研究室)

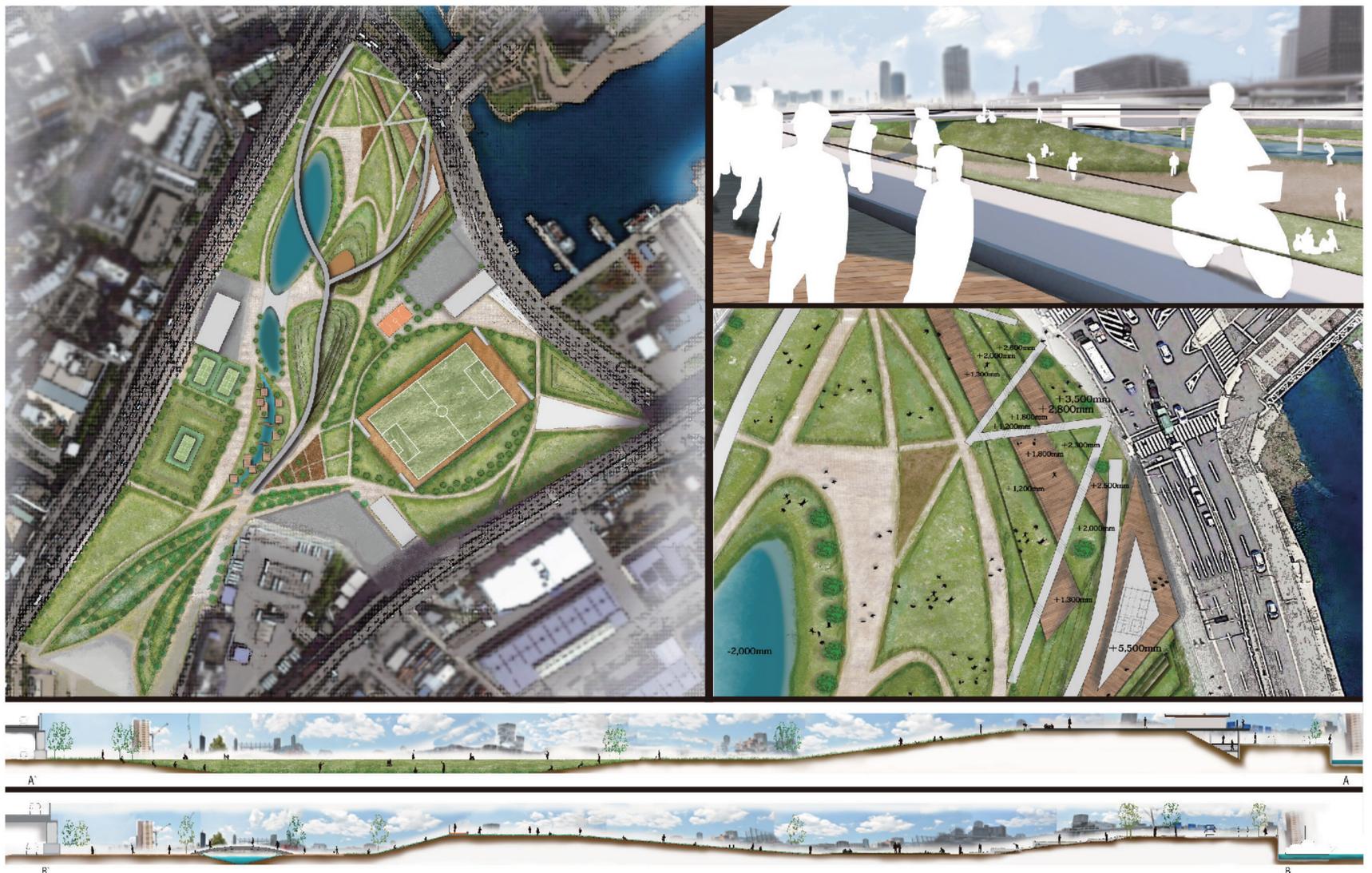
かつての水運機能がなくなり、街の活気も失われてしまった兵庫運河沿い。水運を復活させ、さらに LRT を新設し、それら水運と陸運を結ぶランドスケープを計画する。



街から公園へ 公園から街へ

川添浩輝 (槻橋研究室)

HAT 神戸と港湾地域を結ぶ。貨物駅跡の空き地に街の動線を引き込み3次的に交差させ、人々を滞留させることで新たなコミュニティの場へと生まれ変わる。高低差を設ける事で視覚的、体感的変化を感じ様々なアクティビティを誘発させる。



水際の景色 ー水と共に暮らす街ー

山本修大 (遠藤研究室)

かつて貯木場であった歴史から木の架構をコードとして全体を再編する。リノベーションにより新しく水上レストランやドミトリーが挿入され、足水やビオトープなどソフトスケープとしての水の流れが人々を運河へと誘う。兵庫運河に新しい景色が生まれる。

